〈基調講演〉

# パーシー・グレインジャーという人

ペネロピ・スウェイツ（木下 淳　訳）

皆サン、コンニチハ！　たいへん魅力的な音楽を作り出し、刺激的な発想の持ち主であったパーシー・グレインジャーという人物について皆さんにお話しする機会を得たことを私はとても嬉しく思っています。グレインジャーについては、1 週間でも休みなく話し続けることができるかもしれませんが、与えられた時間はわずか 10 分です。そこで本日は、私が彼について研究してきた 30 数年のあいだに発見したことのいくつかをご紹介しましょう。そこから見えるグレインジャーの姿は、これまで広く受け入れられてきた伝説とはかなり異なります。

いわゆる「グレインジャー伝説」から次の 4 点を挙げてみましょう。

1）グレインジャーの不思議な個性は、奇抜なだけで論理的な説得力に欠ける。
2）グレインジャーは人種差別主義者だった。
3）母親のローズは息子を支配する怪物的存在だった。
4）グレインジャーの性的傾向はすべて母親の責任である。

これらのうちで実証されたものはひとつもないのですが、ここではまずグレインジャーという人物を概観してみましょう。

グレインジャーはヴィルトゥオーゾ・ピアニストとして世に出た人です。1882 年にメルボルンに生まれ、フランクフルトで学び、その後ロンドンに定住しました。1901 年のデビューはすぐに大きな成功を収めました。続く 13 年間に彼は何百ものコンサートを開き、そして作曲をし、録音をし、民謡を収集し、その後のキャリアの基礎を築いたのでした。1914 年、母親とともにアメリカ合衆国に渡り市民権を獲得します。そして、後にはラフマニノフやホロヴィッツなどが立ち並ぶ「スタインウェイを弾く不滅のピアニストたち」の仲間入りを果たしたのです。1922 年に母親が亡くなります。1927 年、スウェーデン人のエラ・ヴィオラ・ストロームと出会い、結婚。そしてその後の 33 年間、彼は次第に偶然性の音楽の実験や、メルボルンに創設したグレインジャー博物館の仕事に夢中になっていきました。生前のグレインジャーは《カントリー・ガーデンズ》のようなヒット作で圧倒的な成功を収めましたが、その

おかげで、はるかに興味深く、冒険心に富んだ作品の数々が目立たなくなってしまっていました。そのことを嘆きつつ、彼は1961年に亡くなりました（現在、シャンドス・レーベルからCD19枚組の『グレインジャー・エディション』が発売されており、彼の音楽の全貌を明確に把握することができます）。

グレインジャーの作品のほとんどは演奏が難しく、演奏者に求めることがらには、彼の生きる態度が反映されています。つまり常に自分を緊張状態にさらし、自らに挑戦を課すという態度です。彼は人一倍活力のみなぎる人でした。ナップサックを背に、演奏会と演奏会の間を60マイル（100キロ）歩きましたし、汽車の旅では徹夜をして寝台料金を節約し、その額を寄付したりもしました。自分の荷物を荷運び用の一輪車に積んで駅に駆け込んだり、オーストラリア行きの最後の航海では、船の機関室で石炭をシャベルですくったりしていました。メルボルンにおけるグレインジャー博物館の建設現場では、労働者たちとともに働いていました。

こうした小気味よい作曲家を理想化することはたやすいけれど、グレインジャーはそれを望みませんでした。彼の取った行動は私が知る限り、他のどの作曲家とも違います。博物館を作り、そこに自分の人生に関わるほとんどすべてを自発的に所蔵したのです。そこには自分の仕事に関わるもの、私的なものも、好ましいもの、好ましからざるものも、すべてが含まれていました。

これからアストリッド・クラウトシュナイダーさんが説明してくださると思いますが、グレインジャー博物館の収蔵品は、楽譜にしても楽器などのさまざまな物品にしても、世界的にみても重要なものばかりです。見事に修復され展示されています。ぜひ訪れてみてください。

自分の全体像をきちんと理解してもらうために、グレインジャーは物議をかもしかねない資料もわずかながら収蔵品に含めていました。私生活やサド＝マゾヒスティックな行為に関連した資料です。生前のグレインジャーが公に論じたことのないことがらでしたが、本人と妻の名誉を傷つけもしたのです。自分についての真面目で科学的な研究に貢献できればよいと本当に願っていたのです。しかしそれはおめでたい願望であったかもしれません。悲しくも残念なことに、こうした資料は不適切に利用され、またその動機も高貴とは言えないことが多かったのです。そうした利用のされ方はその時代に合っていたからです。おかげでグレインジャーに対するよりよい理解が導かれるどころか、人間として、また音楽家としての彼の実像がよく見えなくなることが多かったのです。多くの人の思考はそこで止まってしまいました。

パーシー・グレインジャーを本気で理解したいのならば、彼の少年時代に立ち返る必要があります。それは実に悲劇的な生い立ちでした。両親の不和によって心に傷を受けた子供は、気持ちを落ち着けるためにしばしば自傷行為に走りますが、グレイン

ジャーの場合もそうでした。彼は極めて才能に恵まれた子供で、母親の献身的な教育を受けましたが、酒に酔った父親が暴力をふるう様を見たり、父親に梅毒を感染させられた母親が健康を害し始める状況にも接したのです。その頃までに、彼は母親とともにフランクフルトに移っていましたし、両親は離婚をしていたので、パーシーが一家の稼ぎ手とならねばならなかったのは明らかでした。非常に競争の激しいコンサート・ピアニストの世界で成功するより道はありませんでした。

両親の離婚と母親の不治の病が持つ意味を知ったのは、青年期というまさに最も多感な時代でした。これらの重圧から逃れようとした結果が自傷行為となったに違いありません（彼の自傷行為癖は、傷みを通して意識が高揚すると気付いたことで、その後もずっと続いたのではないかと思われます）。近年、ポピュラー音楽のアーティストなどに、同様の執着にかられる人の実例が多く見受けられ、時には身の破滅にまで至ります。グレインジャーは破滅こそしなかったものの、彼が最も愛した2名ないし3名の人たち――そこには母親が、そして後には妻が含まれるのですが――が、その癖の存在に悩まされていることを自覚していました。こうしたことについて彼は熱心に文章を書き残していますが、もしかしたらそこには罪の告白といった面があったのかもしれません。また彼は生涯にわたり、母親や妻に感謝の言葉をよく述べましたが、そうした言葉は、自分の行動に対する自覚と罪悪感とがミックスされたものとしても読めるでしょう。

もちろん母親がパーシーの自傷癖を初めて知ったとき、彼女はその事実におびえましたし、やがて神経衰弱となりました。思春期にあった出来事を打ち明けられた主治医は、それについてのちに説明しています。前向きな合意がなされたというのです。つまり、母親は彼の音楽活動を管理し、人間関係上の助言を行ない、私生活を私生活として保たせ、社会的・経済的な破滅を回避したのでした。そしてグレインジャーは母親を支え、母親が亡くなるまで世話をすると約束したのです。

母親に対するグレインジャーの感謝や賞賛の表現は、時として過剰に思えるほどです。しかしこうした事情のすべてを知れば、納得がいくでしょう。そう、ローズ・グレインジャーは強靭で活発な女性でしたが、結局そうせずにはいられなかったのです。ローズは大多数の人たちに悪く言われてきましたが、私はそれを気の毒に思います。彼女がどのような人物であったかという研究はほとんどなされてきていません。酒に酔うとしばしば暴力をふるう信頼できない夫と一緒だった22歳のときに、人には言えない進行性の病にかかり、経済的な危うさを常に直面しながら、才能ある息子を必死で守り、育てていったのです。

ローズの生活すべてが、息子の養育に集中したことは驚くに値しません。もちろんそれがバランスのとれた生活をするための解決策になっていたとは決して言えません

が、いたずらに批判をする前に、非常に有能な子に恵まれた親をめぐる多くの事例を考えてみたらどうでしょうか。たとえばモーツァルトの父親の場合はどうだったでしょう？　クララ・ヴィークの父親は？　比較的最近では、ユーディ・メニューインの両親は？　あるいはラン・ランの場合は？――天才児の親は、子供のために途方のない決意を強いられるのです。ローズ・グレインジャーは病気や経済的な不安と勇敢に戦いながら、息子を国際的な音楽家にするべく、その役目を立派に果たしました。数えきれないほどの手紙を興行主に送り、身のまわりの世話をしつつ、息子の作品が出版されて知られるようになるよう、多くの人に働きかけました。このように、破綻しかねない困難な状況をローズは懸命に支え続けたのです。まねのできることではありません。パーシー・グレインジャーが、今日知られているような芸術家になれたのは、基本的に母ローズのおかげなのです。

グレインジャーの活躍の場は世界全体に拡大しました。その作品からもわかるように、彼は世界中の音楽に強い興味を抱きましたし、民俗音楽学が盛んになるずっと前から非西洋音楽を探求していたのです。また我々が現在「古楽」と定義しているものにも彼は夢中になりました。古楽器の専門家アーノルド・ドルメッチと親しくなりましたし、中世音楽の専門家ドム・アンセルム・ヒューズとともにイングランドのゴシック時代の手稿譜の研究を進めました。20世紀初頭のエドワード7世時代のミュージック・ホールでは大衆音楽を楽しみ、かつそれを活用しましたし、後にはアメリカのジャズにも同様に接しました。調性やリズムの束縛から解放された音楽を構想し、そうした音楽で使われる楽器を常々オーケストラ用の作品の中に組み込んでみたりもしました。若き日のグレインジャーは、父親に送られたラドヤード・キップリングの著作にとても親近感を抱き、30を超える彼の詩に音楽を付けましたが、それらはまた驚くほど美しい作品です。

民謡に対するグレインジャーの独特な取り組みは、多面的な彼の仕事の中で最も広く知られています。しかしこの仕事には本人も（たとえ気づいていたとしても）認めることのなかった背景がありました。建築家であった父ジョン・グレインジャー（彼もある意味で夢想家でしたが）は、イングランド最北部のノーサンブリアの建築家や技術者の一家の出身だと主張していたのですが、実際にはグレインジャーの家族はその近くの南ダラムで何世代かにわたって生計を立てていた農夫や熟練工の系譜に遡るのです。つまり、グレインジャー家は彼が最も崇めた民謡歌手たちと同じ出自であったのです。民謡を編曲するにあたり、彼は洗練された和声と楽器法を用いていますが、それらは言葉の背景にある物語の真実性を強調するためです（たとえば《ある朝早く》（Early One Morning）における、強引な短調をお聴きください）。これらの作品を演奏したり、聴いたりするとき、私たちは最も根源的な音楽に、つまり人生におけ

る共通体験を表現する音楽に立ち返ることになるのです。

パーシー・グレインジャーはオーストラリア的な冗談を嫌っていたわけではありません。私は彼のいとこを知っています。ロンドン在住で、夫とともに画家なのですが、彼らはグレインジャーが来訪したときのことを覚えています。彼ら自身の画がたくさん壁にかかっていたところ、パーシーは「おお、ピカソだ、マチスだ」と叫んだといいます。本気でそう言っていたのかどうか、よくわからなかったそうですが、そういう人を喰ったようなところは彼の音楽の中にも感じられるのです。

グレインジャーの言葉に接する際には、それらの言葉の向こう側、もしくはその背後にまで視野を必ず拡げなければなりません。その多くは手紙や日記の中に、まったく思いつくままに書きなぐられたものですが、そのまま保存されています。彼はわざと人を驚かす発言もしました。真意を理解するには一手間かけなくてはなりません。もっとも私自身は「彼が為したことは彼が述べたことよりも重要だ」と結論づけています。終生にわたり、彼はどんな背景や文化を担う人にも親切で寛大でありました。すべての人に場所と役割が与えられた世界が彼にとっての理想でした。かたや北方系の民衆とその文化に対する崇敬の念は一生涯続きました。それは子供のころに北欧の伝説物語サーガを読んだことに遡るのですが、その態度は反ユダヤ主義と誤って結びつけられてきました。20 世紀に起こった暴虐を考えれば警戒するのは当然ですが、グレインジャーは、それ以前の、国粋主義者や古典主義者や人種差別主義者などの発言にまだ注意が払われていなかった古い時代に育ったのです。確かに彼は不愉快な発言もしていますし、自分の失敗については厚かましいほど雄弁に語りました。目標の多くを達成できなかった自覚はありましたし、いろいろな点で心を引き裂かれ、苦悩していましたが、グレインジャーの人間愛や世界的な兄弟愛の理想によって、その人生の大部分が形作られたのと同様、彼の音楽も形作られましたし、また、異文化の人たちとの友情の多くもそのおかげで生まれたのです。

音楽に対する彼の姿勢は、1942 年に評論家のオリン・ダウンズ (Olin Downes) に宛てた手紙に端的に表れています。

> 人類の進歩との関係が感じられない音楽には価値がないと思う。[……] もしも人類が互いに愛し合い、共感し、理解し、尊重し、我慢し、科学的で集中的な態度をいっそう強めることに音楽が何の役割も果たさないとすれば、これほどまでに音楽に時間を費やす必要がどこにあるのでしょうか。

この言葉に喝采しましょう。ご静聴ありがとうございました。

## Percy Grainger, the Man

*by* Penelope Thwaites (pianist/Grainger Scholar)

*Mina-san, konichi wa!* I am very glad to have this opportunity of speaking briefly about Grainger, the man–the creator of so much wonderful music and author of so many stimulating ideas. One could easily talk about Grainger for a week without stopping–but I have just 10 minutes. So in that time, I'd like to share with you some discoveries I have made in the 30 or more years since I have been researching the man. These discoveries have given me a picture which in a number of ways, is quite different from the folk-lore that has grown up around Grainger, and which has been widely accepted.

To give 4 examples of this folklore:

1) His strange originality was merely quirky and without logic;
2) He was a racist;
3) His mother Rose was a dominating monster to whom he was enslaved;
4) His sexual proclivities were all her fault.

Not one of these assertions stands the test of real thought and research, but let us first put Grainger in his context.

His life unfolded as a piano virtuoso. Born in 1882 in Melbourne, he went on to study in Frankfurt and then settled in London. His 1901 debut led to immediate success and during the next 13 years he played 100's of concerts, was composing, recording, collecting folk music, laying the foundations for the rest of his career. He moved with his mother to America in 1914 and became an American citizen, becoming one of the so-called Steinway immortals, in the company of Rachmaninov, Horowitz and others. His mother died in 1922. In 1927 he met the Swedish Ella Viola Strom and during their 33 years of marriage his experiments with aleatoric music and work on a Museum in Melbourne increasingly preoccupied him. He died in 1961, deeply regretting the fact that the overwhelming success of hits like "Country Gardens" had obscured his far more interesting and adventurous works. ( And the sheer range of his music can now be heard most tellingly in the Chandos Records 19 CD Grainger Edition box set.)

Little of his music is easy to perform, and the demands it makes on performers reflect his own attitude to life: constantly stretching himself and setting himself challenges. His energy was extraordinary: he would walk 60 miles, knapsack on back, between concerts; he would sit up overnight on train journeys to save the sleeper fare and give the difference to a charity; he would pile his luggage into a wheelbarrow and run with it to the station! When he took one of

the last great sailing boats to Australia, he was discovered shovelling coal in the engine room–and he worked alongside the labourers who were building his Museum in Melbourne.

It is easy to idealise a composer who has given us such delight. But Grainger didn't want that, and he did something that, as far as I am aware, no other composer did–he voluntarily put into a museum almost everything about his life–both professional and personal, good and bad.

The Grainger Museum's collection of music and artefacts is of international importance–as Astrid Krautschneider will no doubt illustrate. And beautifully re-furbished and laid out, it is a truly fascinating place to visit.

In the interests of giving a complete picture of himself, Grainger included a small collection of controversial material relating to his private life and sado-masochistic practices–matters he never discussed publicly in his lifetime and which impinged more or less exclusively on himself and his wife. He hoped that serious scientific research would benefit. Perhaps this was a naïve hope. Sadly, and to our shame, there has been an exploitation of this controversial material out of all proportion, and often for less than noble motives. It is totally in tune with our age. But far from leading to a better understanding of Percy Grainger, I believe that such exploitation has often obscured his stature as man and musician, for that is where many people remain marooned.

If you really want to understand Percy Grainger, you need to go back to his childhood. He grew up, marked by considerable tragedy. Children whose childhoods have been scarred by parental conflict sometimes turn to self-harm as a way of taking control. So it was with Grainger. He was a phenomenally gifted child, educated with consuming dedication by his mother, but the witness of his father's bouts of violent drunken-ness and the beginnings of the destruction of his mother's health by the syphilis with which her husband had knowingly infected her. By the time he and his mother were in Frankfurt, his parents had parted and it was clear that Percy would need to become the family bread-winner. That meant succeeding in the highly competitive world of the concert pianist.

It was just at this most vulnerable time of adolescence that Percy discovered the full truth behind his parents' break-up, and his mother's incurable illness. It was surely this combination of pressures that drove him to find an outlet in acts of self-inflicted pain. (And I think it's likely that his addiction to pain became permanent by discovering the heightened awareness, reached through it.) We can think of many recent examples–for example amongst popular performers–of similar obsessions–sometimes completely destroying the person involved. Grainger was not destroyed by his addiction, but he knew that two or three of the people he loved the most – including his mother and later, his wife–suffered because of it. Perhaps his effusive writings on these matters had a confessional aspect–and his often expressed gratitude to the women in

his life, could be read as a mixture of awareness and some guilt.

Certainly his mother was horrified when she first discovered Percy's addictions, and suffered a nervous breakdown. Grainger's doctor later described what Grainger confided to him about that time in his adolescence. A way forward was agreed: his mother would manage his professional life, and advise him on his relationships, keeping his private life private , and thus avoiding social and economic ruin. Grainger promised to support her and to look after her until she died.

His gratitude and admiration for his mother often seem overwhelming : but once you know the full story, you can understand why. Yes, Rose Grainger was a tough and spirited lady –but she needed to be. The vilification of her by the majority of commentators has been, in my view, deplorable. There has been little attempt to think what it must have been like for her , facing a lifetime of an unmentionable and increasing illness from the age of 22–dealing with an unreliable husband, who was occasionally violent when drunk, desperate to protect and develop their gifted son, constantly shoring up their financial insecurity.

Not surprisingly, her entire life became centred on the development of her son. It was NOT a recipe for a balanced life. But before being too judgemental, we might consider the situation of many a parent of a supremely gifted child–what do we think of Mozart's father? Of Clara Wieck's? More latterly, the Menuhins' parents? Lang Lang? Parents of prodigies have to make far-reaching decisions for their young children. Rose Grainger battled on heroically through illness and economic uncertainty to play her part in launching her son's international career–writing countless letters to promoters, running the home, and helping him to make the contacts through which his compositions could start to become published and known. She held together a situation that could easily have unravelled. There was no-one else who could have done that. So it's thanks to her, to a large extent, that Percy Grainger became the artist he was.

The world became his stage and he took a consuming interest in it, as his music reflects. He was exploring non-western music long before the days of ethnomusicology; he fell in love with what we term "early music"–befriending Arnold Dolmetsch and working on English Gothic manuscripts with the medieval music expert Dom Anselm Hughes. He enjoyed and used the popular music of Edwardian music-hall and later of American jazz; he envisaged a music free from tonal and rhythmic constraints, he experimented constantly with the actual make-up of the orchestra, the instruments used in it. His father, too, had played a part in sending the young Grainger collections of the writings of Rudyard Kipling–an artist with whom Percy felt such affinity that he was to set over 30 of his poems, and amazingly beautiful they are too.

His distinctive approach to setting folk-song is the most widely known aspect of his

work, but it had a background which Grainger himself never acknowledged–if indeed he knew of it. His architect father, who was something of a fantasist, alleged that they came from a Northumbrian family of architects and engineers. In fact Percy's Grainger family went back to agricultural workers and craftsmen who had farmed in Southern Durham for generations. In other words, they were from much the same background as some of the folk-singers most revered by Grainger. In his folksong settings he used sophisticated harmony and instrumentation to underline the reality of the stories behind the words (listen to his tortured minor key take on "Early One Morning" for example). In performing and listening to those works, we reach back to the very roots of music – to music which expresses the common experiences of life.

Percy Grainger was not averse to some very Australian leg-pulling. His cousin in London, whom I know, and her husband, both of them artists, remember a visit from their cousin. Many of their own pictures hung on the walls. "Ah!" exclaimed Percy "Picasso! Matisse!" And they never quite figured out whether he was serious or not. The subversive element is there in his music too.

When it comes to Grainger's words–you really have to look beyond and behind them. Many of them were dashed off in letters or diaries in a completely unconsidered way, yet fully preserved. And he deliberately said some things to shock. So the onus falls on us to do a bit of work in getting to the truth. My own conclusion is that what Grainger did is more important than what he said. Throughout his life he was kind and generous to many people, of all backgrounds and cultures. His ideal was a world where all had a place and a part. His lifelong admiration for the Nordic peoples and their culture–something going back to his childhood reading of the sagas–has been quite wrongly linked with anti-Semitism. After the atrocities of the 20th century we are rightly alert to that but Grainger grew up in an earlier generation, less careful about nationalist, classist and racist remarks. And some of his were indeed offensive. He was also blisteringly eloquent about his own failures. He knew that he hadn't succeeded in many of his aims and he was, in many ways, a torn and tortured personality, but his humanity and ideals of international brotherhood inform his music, as they informed much of his life, and the many cross-cultural friendships he made.

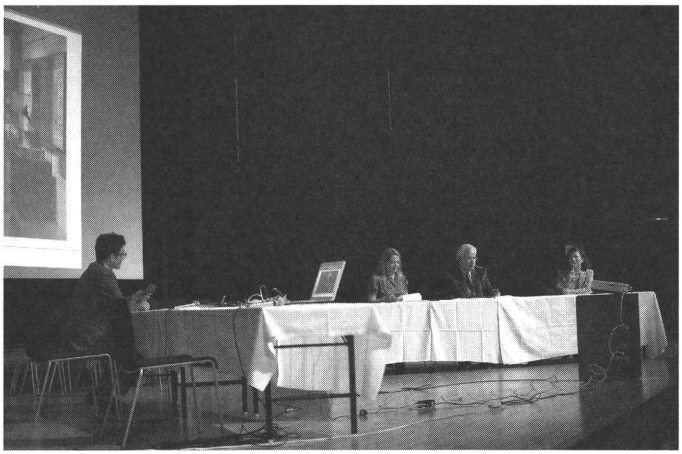
His approach to music is well summed up in a letter he wrote to the critic Olin Downes in 1942: "I'm afraid I cannot appreciate music without some sense of its relation to human progress....if music is not going to play its part in making mankind more loving, compassionate, understanding, thoughtful, restrained, scientific and concentrated, I don't know why we are giving so much time to it."

Bravo to that. Thank you very much.

© Penelope Thwaites, “Percy Grainger, the Man,” keynote speech for “International Symposium: Percy Grainger’s Australian Sprit and Global Mind,” Percy Grainger Music Festival 2011, Aoyama Gakuin University, Tokyo, November 27, 2011; the Japanese version “Pashi gureinja to iu hito,” for the proceedings in *Aoyama Journal of Cultural and Creative Studies* no.4 (vol.4, no.1, March 2012), translated by Jun Kinoshita.

東京公演のポスター

ペネロピ・スウェイツ（基調講演で）



国際シンポジウムの様子（右より柿沼敏江、ラグズデイル、クラウトシュナイダー、宮澤淳一）